



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Literary Fathers and Sons : Charles Dickens, Mark Twain, Sherwood Anderson, and Paul Auster [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	一瀬, 真平
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15581号
Issue Date	2023-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/90238
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Shimpei_Ichinose_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：一瀬 真平

主査	教授	竹内 康浩
審査委員	副査	教授 瀬名波 栄潤
	副査	教授 野村 益寛

学位論文題名

Literary Fathers and Sons:

Charles Dickens, Mark Twain, Sherwood Anderson, and Paul Auster

（文学的父子：チャールズ・ディケンズ、マーク・トウェイン、
シャーウッド・アンダソン、ポール・オースター）

・当該研究領域における本論文の研究成果

19世紀アメリカ文学を代表する作家マーク・トウェインが同世紀の英国作家チャールズ・ディケンズの影響を受けていたことは、これまで多くの研究者によって指摘されてきた。しかし、本論文は、二人の作家が抱いていた実父への敵対心の表象を各作品の中に読み取り、様々な歴史的資料の発掘からそれらを実証的に裏付けた点で、強い説得力を持つ傑出した研究である。また『ハーパーズ・ウィークリー』の記事を元に、トウェインの描いた河上の三叉路における父と子のエピソードが父殺しの主題を含んでいることを指摘しつつ、翻ってディケンズの小説における同様の河上のエピソードにオイディプスの要素を見いだしていく議論は、まさに後発作品の批評を通して先行作品を読み直す白眉ともいえるものであり、ハロルド・ブルームの影響理論を傍証するものにもなっている。同様に、後発のオースター作品の読み解きを通して、先行作家であるアンダソンの再評価を試みた論文後半部も、史料に基づく着実なものでありながら、あらたな発見に満ちており、高い評価に値する。ただ同時に、議論の理論的な枠組をブルームの影響理論に根本的に依拠しており、批評的な発展において物足りないものになっていると言わざるを得ないが、本論文の主要な学問的貢献は、歴史的資料に裏付けされたテキストの精緻な読解であることを考慮すれば、その包括的な価値は揺るがないものと思われる。事実、本論文が、英国の学術研究誌に掲載が決定しているディケンズに関する査読論文、さらに米国の学術研究誌にすでに掲載されたアンダソンに関する査読論文の内容を含んでいることもその証左である。

・学位授与に関する委員会の所見

審査委員会は上述した成果のみならず、英米文学史上重要な作家を複数扱うという野心的な取り組みも大いに評価するが、その一方で、課題として残された問題点についても執筆者へ指摘を行った。

まず、取り扱う4名の作家の選択が、多分に恣意的であるように思われる。特に、アンダソンとオースターの影響関係は、これまでほとんど批評的な関心が寄せられることがなかったために、その取り合わせには奇異な感を抱かざるを得ない。また、それゆえ論文全体の統一性が十分ではなく、影響関係に関する理論的な枠組みが常に意識されているようにも思われない。さらに、トラウマを論じる際にも、精神分析におけるその意義を十分検討しているとはいいがたい。

しかしながら、審査委員会は、本論文の新規性と独自の議論を構築しようとする意欲、さらには数々の歴史的資料の発掘を、これらの問題点以上に評価することで一致を見た。口頭試問においても、これらの問題点を克服し、本論文を元に学術研究書を刊行する際には、すでに申請者が米国で行った草稿調査・研究を加えてより高度な議論へと改善してゆくことが可能であると確認できた。以上の審査状況に基づき、本審査委員会は全員一致で一瀬真平氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であると判断した。